



水上

木綿恋い記

昭和四十五年五月一日発行

定価 七五〇円

著者 水上勉 みなかみ つとむ

発行者 檜原雅春
発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(二六五)二二一(代)

郵便番号一〇二

印刷 精興社
製本 中島製本
製函 文京紙器

万一乱丁・落丁の場合はお取替いたします。

木^ゆ
綿^う
恋^こ
い
記^き

一章

ったのだろう。

馬が首をうしろ向きに擡げたようだと、みたのは由布だけだったかもしれぬ。山は、由布のうまれた塚原の北の盆地の安心院のあたりからみると、富士に似ていたので、豊後富士と人はいった。塚原からは近すぎるので富士にはみえず、ただ高いばかりであった。十八歳まで、この山の麓で暮した由布には、山のかたちは年じゅう同じ型にみえてはいたが、馬や牛の姿のほかに、あるいは熊とも鹿とも、巨大な岩石とも見えることがあった。東南にもう一つ飛岳というのがある、これは扇子型をしていたが、いくら低くて、姿もやさしかった。

塚原の村もそうだけれど、点在する村はみな高原を流れる川に沿うていた。どの家も、野っ原にかたまった森かげに、かくれたようにあったが、戸数は多くて三十戸程度である。山のぐるりを取りまく平原での牛飼いと、稲作が生業であった。むかしから、由布山麓は、栲の木が密生し、この木を蒸して皮をむき、繊維をとって、木綿を織ったという。由布の山は木綿山といったと由布は学校で教わったが、この時、先生がうたった歌に、

名前を柿本由布^{ゆふ}といった。姓は父方代々だから何もうことはないが、由布は、村のすぐ背にひろがるなだらかな山が次第に高まって、馬がうしろ向きに立ちほだかった格好にせりあがる由布岳の名をそのまま貰ったと母から聞いた。小学校の同級に鶴という子がいたが、この子は由布岳の隣りの、これもある種の動物が寝たように見える鶴見岳の鶴をもらったときいたが、由布は鶴よりも自分の名が好きだった。柿本の姓は嫌ったけれど、由布の名だけは得意だった。小学校を出ただけで、女学校へもゆかず、凡そ学問というものとは縁遠かった由布だったが、由布岳についてだけは、かなり知るところが多かった。名前の手前もあ

「乙女らがはなりの髪を木綿の山雲なたなびき家のあたり

見む」

というのと、

「思ひいづる時はすべなみ豊国の由布山の雪消ぬべく思はゆ」

というのがあった。ともに万葉集という古い歌集の歌だそう。一の歌は、若い娘たちが、おかつ髪を結うという名の由布山に、どうぞ雲よかかってくれな。旅に出る途中に一と目家のあたりを見たいと思うから……と、在所を出る人が歌ったということだったし、二の歌は、あなたのことを思いだすと、豊後の由布山の雪が消えるような、やる瀬ない気持ちにつつまれる、という、恋歌だそう。両歌とも、由布には生涯、自分のことをうたわれているみたいな気がした。

昭和二年三月二十五日、麓の草を焼く野焼きの日に生れている。部落をめぐる野原という野原が赤々と燃える午なかにうまれた。

野焼きは九州一円の高原で催される草焼きである。害虫を焼き、やわらかな牧草をとり、あわせて、灌木やいどらなどの茂るのを防いだ行事で、いつ頃から、こんな野焼きがはじまったか。由布は誰からもきかなかったが、山麓に

牛が飼われたのは、神代の頃だったときいたから、おそらく大昔から、火というものが出来た頃からはじまったのかもしれない。

塚原の部落では、ガラン岳とよんでいる鶴見の裏山の下から、由布岳の麓にかけた広大な野原に、毎年三月二十日に火をつける。火は誰がつけてもよい。そこらじゅうから火の手があがって、一日じゅう煙が山を這い、赤い炎は山を焦がしてゆれ動いた。部落総動員だった。大人も子供も野へ出て火をつけて歩いた。

風は山から吹いた。風が吹くと、火は思わぬ方に広がるので、大人たちは、要心のため、焼いてはならない干草のコヅミだとか、輪型の土地にうつる火を防いで歩いた。広い野原だ。一日では焼きつくせないの、一週間か十日かかった。草がみな焼きつくされたあとに、萌え出る新しいみどりの美しさには、誰もが見惚れた。新芽は四月末、黒茶色に焦げていた大地が、まるで、二三日でぬりかえられたかのように、淡みどりになる。五月がすぎ、夏がくれば、このみどりは濃くなり、陽をうけて草はむれ、うるしをとかしたように光り輝いた。草原には朝夕狭霧が落ちた。みどりはみな乳色にかすんだ。牛はその霧の中へ放たれた。

豊後牛は黒いので、火山岩とまちがえるほどに山へ散って
みえた。背高い夏草が刈られて、秋がくると、芝草がまず
紅葉しはじめて、この頃もまた野焼きかと思うほどに赤く
なるのだった。

由布がこの世に生まれ出た日、塚原の部落は真っ赤に燃
えていた。野焼きの二十五日に産気づいて「おら、おめを
産んだんじゃ」と母にいわれた。

父は日出生台の採石掘りの人夫で、柿本岩松といい、母
はたねといった。十八までの記憶だと、父はおとなしい無
口な人柄で、気も弱く、母に敷かれ放しだった。そのかわ
り母は豪気だった。田作りと、牛飼いに精を出し、父が留
守がちなものだから、家のきりもりはみなしたし、父の呑
めない酒も母が呑んだ。塚原には大酒呑みの女が多かった
が、母は横綱級で、秋末の甘酒祭がくると、霧島大明神の、
神殿前のふるまい酒をガブ呑みしてきて、由布がおぼえて
いる年だけでも、三度は戸板にかつがれて戻った。

小肥りで、色白だった。眉がうすく、眼が大きくて、黒
眼の澄んだ、ととのった顔だちだった。胴もくびれて尻が
大きかった。病氣一つしたことがなかった。この母の容貌
と、体格、性質、みな由布がうけついでものである。弱気

だった、おとなしい父の爪のあかでももらっておれば、由
布はもっとべつの人生を生きたかも知れぬ。

家は塚原の部落で、まあ中ほどの規模だったろう。茅ぶ
き入母屋の母屋に、向いあわして同じ茅ぶきの牛小舎があ
った。家の横を川が流れていた。深くもない川底に石が散
らかつていて、ガラン岳と、由布岳のあいまの谷水は涸れ
たことがなく、夏は格好な遊び場になった。由布は男の子
らと真っ裸でよくここでエノハを獲った。高原は冷気もき
びしかったが、真っ裸であそんだ。村の子らは由布が裸に
なると、息を呑んで見た。色白で、ふくよかだった由布は、
七つか八つの頃に、もう乳房のあたりがふくれ、いまなら
珍しくもない話だけれども、十三で初潮をみている。少女
の頃から、由布には色白の軀を自慢するところがあつて、
川あそびとなると、まっ先に全裸になった。パンティもつ
けず、しぶきをとばして浅い川を馳けた。男の子らも、も
しろん猿股などはいてなかった。由布は、どの男の子より
も背丈が高かった。

頭も賢いといわれた。これは酒呑みの母のものでなくて、
弱気で無口だった父のものだったか。母は手紙も書けない
文盲で、ただ働くばかりだったが、父の方はよく村の人か

ものか、いってみれば無常観のようなものが、理屈からではなくて、毛穴から感じとられていたことに本人は気づいていない。遠縁筋にあたった塚原の在の藤村家から、湯布院の禅寺へ小僧に出て、のちに京都の本山で成功した老師が、折よく、北九州一円の布教にきていた。父はこの人が縁筋だったおかげで、京都の本山で高い位階にある老師の引導で埋葬される榮譽をうけた。夏だったので、老師は緋の羅袈裟を肩背にたらしめて遺族が最期の別れに泣くのを慈悲深い眼でみていたが、葬式がすんで齋膳が出た時、由布はこの越山老師に、へ人間はなぜ死ぬのですか」と訊いている。

「仏さまがよんでくださったんじゃ……」

老師はやわらかい返事をした。棺に入れられて、埋葬谷までかつがれてゆく父の行列に、弟の太市とふたりならんで、母に手をひかれて歩いた。仏さまが、遠くからよんでいたの、父はあの世へ逝ったか、と思いかえしてみるが、理解できなかった。昼間、分教場の教室で、板戸をふるわせるほどのハッパの音をきいているし、父の死んだのは、爆薬の仕掛けに手ちがいがあって、運搬夫が現場にいたのに、火をつけた誰かがあやまった。逃げおくれた四人が

下敷きになって死んでいる。

仏さまがよんでなぞいるもんか。嘘だ。どうして、ハッパをまちがえた男が仏なぞであるものか。老師の微笑している顔をにらんで、

「そげんこと、ないわ」

と口の中でつぶやいていた。だが、いずれにしても、ハッパの火つけ役が、あやまったにしても、死は急に訪れている。それが悲しかった。

父が死ぬと、生活は苦しくなり、母は牛飼いと田仕事で一日じゅう働きまくらねばならなくなった。陽のあるうちは、家にいたことなどめったになかった。太市は当時三歳である。由布は太市を背中にくくりつけて学校へ通った。背丈の大きな由布が、太市を負うていると、遠眼は母親かと思えるので、村の人らは、へお前が産んだ子のようじゃのう」といった。子守りしながらの勉強に誰もが感心して、眼尻をぬらしてくれた。

そんな分教場通いだったから、負けてはなるまいという意地もあり、家にもどっても、予習復習などしたことはない。教室にいるうちに先生のいうことは細大洩らさず耳に入れ、一生懸命暗記した。一つ困ったことは、教室の一ぱ

んうしろの机をあたらせていたので、うしろの床であそばせている太市が、小便したり、泣きぐずる時である。そんな時、由布は、ほかの生徒にめいわくがかかることをおもんばか
慮^{おもんばか}って、太市を抱いて外へ出た。そうして、砂場のあたりへ、太市を放^{はな}っておくと、また教室へ入^{はい}って行った。先生によつては、そのあいま、やさしく待つてくれないのがある。先へすすんでいる。この時だけは口惜^{くや}しかった。だが、太市を守りしながら、優等の成績で由布は分教場を出た。ついで湯布院町の高等科に入^{はい}ったが、その時はもう太市は大きくなつていたので、守りもいらなく、最上位の成績で卒業している。

柄^{がら}が大きくて、美人で、おませで、惻^{はつ}究^{きう}とくれば、誰^{たれ}がみて、由布は、晴れがましい将来を約束されねばならぬ娘^{むすめ}といえたわけだが、不思議なことに、卒業してから家で母と一しょに暮^くすようになると、目だたないただの娘^{むすめ}になった。十五、六からめつきり大人^{おとな}めいた時期にきて背丈^{せたい}も、知恵も、激しい労働のために延びが停^{とど}まったのである。誰よりも大きくてすばらしかった色白^{いろしろ}の軀^{からだ}が、他の娘らに追^おいぬかれた。いわば早稲^{わせ}のかなしみといえようか。五尺三寸といえ、女ではまあ大きい方^{はう}だけれど、子供の時代

を知る人には意外だった。労働の激しかったのは、牛追^{うしお}い仕事と、田仕事がつらかったためである。それに、田のすべてが小作田で、収入も少なかった。父が生きておれば、日出生の工業場の給金^{きいきん}が入^{はい}ったが、それもならない。母とふたりして、働く日傭^{ひよう}が唯一の現金収入で、しかも、病身の太市にみな吸^すいとられている。太市は、どういうわけか父に似て柄^{がら}も小さく、陽見^{ひみ}ずのように育ち、蒼白^{あおしろ}かった。幼少時からじん臓^{じんぞう}がわるく、脱腸^{だつちやう}だった。三つ四つから、〈大ぎんたま〉と子らにいわれた。股間^{こかん}に大きくふくれたものをもつていて、そんなものを持ちあわせていない由布は、太市を川へつれていっても、裸^{はだか}にして泳^{およ}がせる時ははずかしい思いがした。脱腸^{だつちやう}のかげんもあって、太市は下腹部^{かぶ}ぜんたいがひ弱^{ひじやく}で、年じゅう医者^{いしや}にかかりづめで、跡取^{あとどり}りの子がこうでは将来も暗^くかった。したがって、母は、父の死^しとこの太市の病身^{びやみ}なこと、めつきり顔つきもかわりいつも、いらだつた眼^{まなこ}をするようになった。母がそうなら、由布もまた、知らず知らずに同化^{どうか}されていく。柿本^{かきもと}の家は、由布が十五になって、外働^{ぐわいどう}きが出来、給料^{きりう}がとれるようになるまで、明るい笑い声^{わらいこゑ}がしたことなどなく、貧苦^{ひんく}のどん底^{どんぞ}を這^はいまわっている。

由布が父の死を悲しく思いかえしたのは、生活苦のせいである。生きていくれさえすればという思いが、あの世からよんだという仏さまへの憎しみにつながっている。

少女時代を回想して、由布がもっともなつかしく思い出すのは、やはり、塚原の川あそびである。獲れた魚は、アブラメとエノハで、アブラメは、地方によってはヤマメとよばれる小魚に似ていた。エノハも鮎あじのようで、なめらかな肌をしていたが、鮎とちがうのは、背なかに赤、黄、青の斑点がいくつもあることだった。この小魚は、石と石のあいまを敏捷に泳いだ。犬柳や銀柳の小茂りの下に、ところどころ淵があった。ここへ釣糸をたらすと、エノハはよくかかった。男の子らと一しよに、裸になって淵へもぐり、石のうろとへ手をつつ込むと、かならず、拇指大のエノハが指にふれ、たやすく掴まえることが出来た。獲れたのを、岸で待っていた太市のバケツに入れる。夕方に帰ってくる母にみせると、大きなのは器用に包丁ではらわたをとって焼いてくれたし、小さいのは、つくだ煮にしてくれた。どっちもおいしかった。

川岸の茂みにはイチゴがいっぱいになっていた。塚原のイ

チゴは、近在の山イチゴより、粒が大きくて、色も黄味がかって水っぽく、腹をへらしてばかりいた姉弟には、格好な間食となった。夏がくるまでこのイチゴは、草叢にのこっていた。細い幹にはイタイとげがくっついていたので、草叢へ入る時は注意せねばならず、手足はいつもトゲのひっかけ傷で血が出た。ひまがあると由布は、太市をつれて、山野をかけめぐった。

塚原には川は二つあった。というのは、ガラン岳の、のちになって鮎泉宿が栄えて、塚原温泉というようになった。硫黄の水の湧くあたりから流れる川と、もう一つ由布岳の中腹の原始林の谷から湧く水の流れである。魚は鮎水の川には住まず、清水の川にだけいた。

夏は、野原を走りまわっていても、薄着でよかったが、八月末はもう秋だった。高原の秋の夕刻は冬の音だ。寒風のふく野面を、太市をつれて夏着で走っている由布は、いつになったら、母が給をだしてくれるだろうかと、悲しかった。他所仕事に出づめである母は、姉弟を腹いっぱい食べさせることで精一杯で、なかなか、衣類にまで手がまわらなかった。

湯布院の高等科へ通う頃は、もう初潮をみていた由布だ

から、通学みの身装なりも気になった。金持ちの子らが、いち早く、服を着、靴くつを履はいて通うのが羨うらやましかった。

由布が高等科を出て、母の仕事を手伝い、日傭ひよいや、草刈りに精出すようになって、どうやら、現金収入もふえたが、この時分から柿本の家は明るくなっている。しかし太市の病弱はいいかかわらずで、湯布院へかかる医者代もかなりあった。

由布が十五歳の頃から、戦争はだんだんきびしくなった。それは塚原から湯布院へ通う途中にある日出生台の演習地をみてもわかった。物々しい装甲車が何台もならんで、何百人とも知れぬ兵隊が、一日のうちに駐屯ちゅうとんしてきて、毎日のように、実弾射撃であった。山がゆらぐほど大きな大砲の音がした。戦争は支那大陸だけでなく、南方の、仏印、マレーでも起きていた。十二月に太平洋戦争が起き、塚原の部落にも召集令がきて、赤禱あかだすきをかけて出発する予備兵役の年となった者がふえた。

「お前は、兵隊にもなれん弱虫じゃけん……」

と母は、太市をみてよくいった。

「大きいうなったら、なにして喰くうちゆくかのう」

まさか、病弱の太市に、背負せおわれる老後をたねは想像し

たわけでもあるまいが、将来のことを考えると、暗い気持ちだっと思う。しかし、たねは、病氣一つせず、自分に似て、鳩胸はとむねのむっくりふくれ上り、もう年増女みたいにぼたぼたしたお尻しりをでんとすえ、村の女たちに仲間入りさせても、柄も物言いも一人前の由布に、ほんと安心するものがあったか、どこぞの普請の手つだいに行つて、ふるまい酒があると、酔よつて帰った。根っからの酒好きとみえて、当時はもう、醬油しょうゆも、日本酒もみな配給だったのを、この権利だけは、いじきたなく固守して、切符がくると、由布に買いにゆかせた。いまから思うと、母は三十で未亡人になっているのだから、軀からだの淋さびしさを、労働と深酒でまぎらわせていた感じであった。母が酔うてしまつて、帰りがおそいのを、いくどか、家の表の銀柳の下で、由布は待っていたことがある。戸板にのせられて戻る時など、泣きたいほどかなしかった。

「お母ちゃんの馬鹿ばかつたれ……」

と由布はいって、村の人らから、酔いつぶれた母をあずかって、家へ入れ、頭から水をあびせたい気がしたが、酔うと、気の大きくなる母は、鼻唄はなうたなど唄い、どこそこの男が、お母ちゃんの手をひいたとか、話しかけてきて困った

とかいって、しばらく、さわいだから、死んだように寝入った。朝方になると、忘れたようにけろりとして、母はもう仕事に出ていなかった。

漢口が陥落したり、南京が陥落したりした時には、その酒の特配があったが、太平洋戦争がはじまると、ボルネオ進駐や、シンガポールの陥落、マニラの陥落などと、捷報の入るたびに、不思議とまた酒が出まわった。

「由布、お前も、ちっと呑まんか」

母は、茶碗に一杯ぐらいはくれたことがある。由布ははじめて、口をつけて、吐き出している。父親似だったのだらう、ぷーんと鼻をつく臭気だけで、胸がむかついた。この酒ぎらいは、生涯のものとなったが、あるいは、母の醜態を何度かみせられていたので、女の酒呑みは、見苦しいという気持が、誰に教えこまれるわけもなく、由布を自然とそうようにしたとしか思えない。分教場にいる頃から、由布の身辺には男の子はいたけれど、高等科を出てから、しよっちゅう家へ出入りした隣家の岩次に、由布は、ほのかな恋心を抱いていた。岩次は、二年上だが、由布が七つ上りなので、年は三つ上、軀も大きくて、いかつい肩をしていた。色も浅黒く、造作はまあ十人なみで、色男とはい

えなかったけれども、骨太さには好感がもてた。小さい頃は、よく川で真っ裸であそんだ仲間だから、由布の圧倒するような成長ぶりに、いつしか顔をあわせても逃げるようになってゆく同級生や上級生に比べて、岩次だけは、気安く、家を覗いた。この岩次が、一度だけ、由布の手を握って五分間ほど息をつめて走ったのも、野焼きの火の中だ。もう少しで、丸焼けになるところを救われている。十五の時だ。

どうして、草を焼いている最中に、そんな危険なコヅミの近くにいたかわからない。気がつくと、火は周囲からめらめら炎の舌を這わせて、由布のいるコヅミに燃えうつつた。逃げようとしたが、煙がむくれているから、おそろしくて足がひるんだ。熱気と煙にむせてその場に倒れそうになった。じりじり足もとの草が焼けてくる。いつ大声をあげたか解らない。とにかく、お母ちゃん、お母ちゃん、とわめいていたらしい。気づくと、岩丈な男が煙の中から走ってきて、由布の軀を抱えた。由布は、男の首にしがみついていた。それが隣家の岩次であることに気づいたのは、火からだいぶ遠ざかって草叢におろされてからである。はあはあ息をつき、腹を汗ばんだ手で抱えられているのに気

づいて、はずかしかった。

岩次は命の恩人というだけでなく、生れてはじめて抱きかえられた男として、由布の胸底に秘められた。だが、岩次の前で、あからさまにそれをいう勇氣はなかった、道で出あっても、赫^{あか}くなってうつむいていた。

この岩次が、志願兵として、二十歳で久留米へ入隊していった日は、眼^めがはれるほど泣いた。この当時、村に召集者や、入営者が出た場合は、総出で、壮行会が催されたが、出発の朝は、村人は霧島大明神に参詣^{さんけい}して、ここから湯布院へバスでゆられてゆくことになっていた。宴会の時も、隣家のよしみで、由布は母と共に煮焚^{にた}き仕事を手つだった。岩次は、国防色の詰襟^{つめえり}服に日の丸の赤襷^{あかたき}をかけ、〈元気でいって参ります〉と会う人ごとに、もう兵隊になったような物言いでいって、敬礼した。そんな岩次の、心もち桃色がかった興奮した顔を垣間^{ぐま}みて、由布は人知れず、どうしても、こっちを向いてくれないかと、胸をこがした。

霧島大明神で挨拶^{あいさつ}の時、岩次は誰に教えられたか、どもりながら、大人^{おとな}のようなことをいった。〈本日は、私ごとき弱輩^{じやくはい}の者の入営に際し、全村の方々のお見送りをうけ、恐縮に耐えません。また、皆さまから多大の餞別^{せんべつ}にあずか

り、ありがとうございます。入営いたしますれば、一意専心軍務につとめ、天皇陛下のおん為^{ため}に命を捨てる覚悟であります。塚原村人として、恥じない軍人になる覚悟でありますから、どうぞ他事ながらご安心下さい。また、あとにのこりました老父母のこと、よろしく、お願いいたします。元氣で行ってまいります〉挨拶は、いまでも眼をつぶれば、思いだせる。

この岩次も、一年目に小さな骨箱になって、白布につつまれて帰っている。湯布院の駅まで、遺骨を迎えにいった日は、もう戦争の終る一と月ほど前である。七月の暑い日だった。岩次の老父母と一しょに、由布は、国防婦人会の白襷^{あかたき}をかけて迎えた。不思議と、大明神で行なわれた村葬の日にも、由布は泣いていない。口惜^{くき}しかっただけである。もうその頃は、村には若い男は一人もいなかった。

十七から由布は別府へ出て、療養所の炊事見習になった。療養所は、軍人専門で、戦地で弾丸に当って、足を切ったり、手を折ったりした兵隊や将校がいた。中には、両足がなくて壺^{つぼ}の中へ入って護送されてきた兵隊もいた。建物はもと温泉旅館だったものを病院に改造したものだったが、

いつも、ここは負傷兵で満員だった。軍医と看護婦と經理將校のほかは、由布たち賄婦がいるだけで、病室につめこまれた傷病兵の所へ、ときどき由布は掃除にいったが、眼を閉じたいほど気の毒な傷病兵をみて心が痛んだ。戦争はもう負けたという噂もつたわった。キスカ島や、南方前線では撤退、転進などという言葉がいわれた。ラジオをきいても、撃沈する戦艦の数は少なくなり、ガダルカナルや、ニューギニアでは、日本軍が負けたというはっきりした報道があった。傷病兵の集まる療養所にいるのだから、敗け戦さの知らせは早かったのかもしれない。

肝心の八月十五日の終戦の詔勅を、由布は聴いていない。十四日から、塚原へ帰っていたからである。弟が寝込んだという報らせをうけて、由布は、休暇をもらって別府を十四日に出て、その夕方塚原につき、弟を見舞って、翌日のひる頃に塚原を出、別府にもどっているが、正午にあった敗戦詔勅のラジオ放送は、ちょうど、ガラン岳のふもとを歩いていて聴かなかった。暑い陽ざかりで、由布は長袖のブラウスの上に黒い木綿のもんぺをつけ、黒のズックをはき、防空頭巾を首からうしろへたしていたが、二時すぎたころに別府へついて、療養所のある亀川の街筋を歩いて

いる時に、奇妙に人通りがなく、静かだったのが、のちのちまで印象ふかく思いだされた。道であう人の顔は、放心したように力がなく、どの家も戸をしめて、しずまりかえっていた。戦争に負けたということは、療養所に入ってはじめてわかった。

賄室では、放送はあったにしても、まだ陸軍や海軍の偉い人たちの中では、戦争をやめなさいという人がいて、外地では戦さはつづけられているそう。この戦さで、大勢の人が死に、療養所をみただけでも気の毒な負傷者で充滿しているのだ。いまだ敗けたでは泣くにも泣けぬ。大本営は一人一殺といい、アメリカ兵が上陸してくるのを予想して、そこらじゅうにタコ穴を掘り、女子供にまで竹槍訓練を教えていたのである。まだまだ、戦争はつづく……などといって、泣きながらわめくものがあったり、反対に、戦争はもうすんだのだ、この上、気の毒な負傷者が送られてくるのを見ないですむといって、ほんと安心したように、眼頭をうるませる人もいた。どっちを信じていいかわからぬ混乱がつづいていた。九月十五日に、由布は塚原へ帰った。アメリカの兵隊が進駐してくるので、若い女性は山へかくれるか、近くに在所のある者は、いち早く帰って、農業に

従事した方がよい。おそらく、日本に飢餓地獄がくるだろう、という噂がひろまったからである。由布は、日出生台の沖に敵の軍艦がやってくるという前日に、同僚に別れて塚原へ帰っている。

この年、十八歳であった。もう塚原は、秋の風が吹いていた。由布の山裾^{やまじり}にところどころ紅葉した楓^{もみぢ}が西陽をうけて映えていたのがいまも鮮明だ。

当時は、塚原にも疎開者がいた。由布などの知らない人の顔がいっぱいあった。みな、塚原の部落の近親縁故の者ばかりで、むかし、家を捨てて出ていった次男、三男、あるいは、それらの人びとの細君や子たちであった。中には、朝鮮や満州にいて、老父母がひと足先に故国へ帰ってきたというような人もいた。血縁筋ではないが、地方に出ていた近親者が、恩になった間柄^{まがら}だとか、あるいは同僚だったとかした縁故の者もいた。気の毒なのは、次男、三男のうちで、別府大分にいた者ならまだいいけれど、大阪や神戸で焼け出されて、着のみ着のままで帰ってき、男は兵隊にとられ妻子だけが、馴染^{なじ}まぬ村の隅^{すみ}で暮している姿である。塚原は、知らぬまに戦争中の三倍にもふくれあがっていた。塚原だけではない。近くの若杉も、湯布院も、安心院もみ

なそうである。のどかな山間の村には、家を失い、食糧に飢え、遠近の縁筋をたよってくるこれらの疎開者があふれた。

由布の家には、さいわいなことに、頼^{たの}ってくる者はなかった。父は兄弟はなかった上に、早くに死んでいるのだから、かりに父方に遠い親戚^{おき}がいたにしても、家の苦しい事情がわかってるので、やってくる者はなかったのだ。母は、同じ塚原の部落からきてはいるが、この親許はすでに廃家だった。母も孤児のような身の上なので、厄介な疎開者を世話しなくてすんだのである。由布は、別府の療養所が、温室のような働き場だったせい、村に帰ってはじめて、疎開者と村人とのあいだにかわされる憎しみあった眼をみて肌寒くなった。一つは食糧が欠配で、疎開者は、芋やスイートンばかりで暮さねばならないのに、農家は、きびしい供出の眼をぬすんで、かくし米をもつ者があって、それを、疎開者の、衣類や貴金属などと交換して、肥^{ふと}っていく事情もあったのかもしれない。あんなにまで、兄弟姉妹が、口ぎたなくのしりあわなくても、と思うような争いがあった。ある家などは、疎開者の方が喧嘩^{けんか}に勝って、以前からいた村人を追い出してしまったという家もあったし、